

# いしづち

2024.5

MAY

No.158



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



八幡浜の家

道後温泉の美術品編・伊佐庭如矢

世界建築紀行 大天使ミカエルが導いたモンサンミッシェル

1	八幡浜の家		道上壯/V u A……①
2	道後温泉の美術品編：伊佐庭如矢		一級建築士 野本 健……③ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……③
3	世界建築紀行	大天使ミカエルが導いたモンサンミッシェル	西予支部 松山 清……⑩
4	委員会報告	大洲市の有形文化財 旧松井家住宅 文化財・まちづくり委員会 委員 菅野 隆次……⑮ 令和5年度全国まちづくり委員長会議報告（熊本） 文化財・まちづくり 委員会 委員長 峰岡 秀和……⑯ 委員 花岡 直樹……⑯	
5	けんちくの輪	ひのまる工務店のこれから 楽しいを見出す	松山支部 島本真裕子……⑱ 西予支部 和氣 巨秀……⑱
6	お知らせ	第6回理事会議概要報告 年会費納入のお願い お詫び	事務局……㉔ 事務局……㉕ ……㉖

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



### 透明水彩、紙

題：「猫島(青島)の中学校」  
サイズ/F3

瀬戸内海に浮かぶ、通称・猫島(青島)は愛媛県大洲市にある。青島中学校は1968(昭和43)年に廃校。かなり朽ちた状態となり、半ば緑に埋もれている。

青島には島民15名程に対し、猫が100頭以上も生息しており、「猫の島」として知られている。 HP「廃墟検索地図」より

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ  
1980 小学校から高校まで松山在住  
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞  
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞(愛媛県建築士事務所協会主催)  
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ  
1996 日本工業大学建築学科 卒業  
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催  
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」(新潮社)の装丁担当  
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)  
2010 愛媛県美術館に作品「ドライブフラワー」收藏される  
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載  
絵画教室やオリジナルブランド額工房「糊リチエルカ」を設立  
2017 「えひめの塗り絵」を出版  
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。  
現在、現代日本美術会 会員/審査員

# 八幡浜の家

道上壯 / VuA

HK.Houseから繋がって実現した建築はYM.House「八幡浜の家」だ。その当時／2005.11－2007.11／こんなことを考えていた。

極度に過密した大都市でもなく、悠々と自然が広がる田園でもない地方都市。そこに住もう一つの手掛かりとして「街の情景」がある。

ビル、家、大通り、裏路地……様々な都市の要素が一定の範囲に無造作に置かれている。それが地方の都市空間の特徴だ。大都市や田園のメガスケールとは異なった、人の身体感覚に呼応する密集感・凹凸感がある。このちょっとした心地よさこそが地方都市の持つ「街の情景」だ。

「街の情景」を、敷地の中や建築の中に反復する。それは、環境や街との緩やかな切り結びを意味する。反復することで同じ要素が外部との連続性・共通性を生み、また、反復することでその完結性が外部との遮断性・個別性を生む。そして、そのどちらも、どちらかを圧倒するほどの強いアイデンティティを持ち得ない。どちらにも解釈可能な「ゆらぎ」のようなものがある。この「ゆらぎ」は地方の文化・経済・人に通底する特有のものでもある。建築が人と街とを「ゆらぎ」ながら切り結ぶ。「街の情景」を帯びた建築だけに可能なことだ。

当時の文章を振り返ってみると、畑寺の家とは違った「建築と周辺環境との関わり」を、僕は考え始めていたことが分かる。畑寺の家は周辺環境との「呼応」。八幡浜の家は周辺環境の「反復」。



YM.House 1F Living Room



YM.House Southeast

八幡浜の家の敷地は、道路の向かい側にスーパーがあり、それ以外の三方向は一、二階建ての住宅が建っていた。近くには老人福祉施設やマンションや簡易裁判所、少し離れたところには市立病院もあった。あたりを見渡すと、いつも何処かに人がいて賑やかで、周辺の建物は高かったり低かったり、出っ張ったり引っ込んでたりと、とてもリズムカルで元気な感じのする街並みだった。この街並みを目にした時に、この雰囲気を実体化しようという思いが浮かんだ。

街のイメージを再現するということは、つまり、街の有形無形の要素を使って、建築を組み立てるということだ。簡単に言えば何かを反復するということだ。反復を噛み合わせながら、パッと見た時の印象を街と合わせるわけだ。街の通りから見た時も、住宅に入った時も、同じ雰囲気、同じ印象を感じるような建築を考えればいいわけだ。

イメージや雰囲気の組み立ては、あくまでも個人的な感覚によるものになる。しかしながら、建築を見た不特定多数の人たちにも、同じようなイメージや雰囲気を感じてもらう必要がある。そのためには、街のことを少し詳しく知っておく必要がある。幸いなことに、八幡浜は僕の生まれ故郷で、高校卒業までを過ごした場所でもある。さらに八幡浜の家の敷地は、小学生の頃によく訪れていた場所でもあるのだ。

僕が小学生の頃、八幡浜の家の敷地には、地元企業の社宅があり、その敷地内に「ちびっこ広場」というちょっとした公園があった。確か砂場と雲梯とブランコがあったと思う。学校が終わった後、ここに来てブランコでよく遊んでいた。ブランコの鎖が地面と平行になるぐらい、友達と競って漕いでいた記憶がある。子供達が大勢遊んでいて、いつも賑やかで楽しい場所だった。その雰囲気は未だにここにはある。街並みは変わってしまったが、高低・凹凸・人・賑わい・元気……、しっかりと街に刻まれた「街の情景」は、変わることなくここに存在していたのだ。

僕は、昔と今の「街の情景」を思い浮かべながら、建築をスタディしていった。この敷地には、ドカンと大きな一棟の建物は不釣り合いだ。まわりと同じように高低・凸凹・大通り・路地など、街並みの要素を取り入れた構成が周辺環境と馴染むだろうと考えた。住宅棟とガレージ棟を、分けながらも繋がる構成にした理由はこんなところにある。そして、建物全体を中庭を囲むL字型で配置しながらも、完全に閉じるわけでもなく、開くわけでもない、両義性を帯びたものにしたのも、街並みの要素からヒントを得たものだ。

内部空間で意識したことは、平面的にデコボコしていて、断面的にデコボコしていることだ。家の中に入っても街の通りの雰囲気を感じるようにしたかった。地方の田舎町の体に馴染むようなちょっとした空間の心地よさ。ある意味、中途半端でどっち付かずだが、感じる人がその幅の間をゆらげる寛容さを持っていても良いのではと考えた。そして、街の持つ賑わいや元気を、縦空間の持つダイナミックさで表現できればとも。



YM.House 2F Utility



YM.House 2F Bedroom

……こんな風に、YM.Houseは感覚的にスタディを進めていった建築だ。HK.Houseはデジタルにロジカルにスタディした建築だったが、バトンを渡されたYM.Houseは、全く逆のアプローチの建築だったといっても過言ではない。建築には、設計者の通底する考え方も必要だが、その場その場でのアドリブによる一品生産による可能性も否定してはならない。

僕が「八幡浜の家」を手がけて成長したことは、建築を外から中へ考える、中から外へ考える、そして同化してゆくということに気がついたことだ。HK.Houseは外との関わりから内部空間や建築が出来上がっていった。YM.Houseは中も外も一緒に一体で、同位体であることが重要だった。通りだろうと、スーパーだろうと、公園だろうと、リビングだろうと、内外の意識の区別なく、ちょっとした心地よさの「ゆらぎ」を感じながら「街の情景」を思い浮かべられる建築になること。そんなことに無謀にも取り組んだ、思い出深い住宅がこのYM.Houseだ。

# 道後温泉の美術品編：伊佐庭如矢

執筆： 一級建築士 野本 健  
監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



<謝辞>

長井 健様

【愛媛県美術館 学芸課長】

石岡 ひとみ様

【愛媛県 専門学芸員】

袖山 俊夫様

【伊予史談会】

◀ 又新殿・霊の湯棟2階展示室

<おことわり>

以下記載内容は、現在の道後温泉本館保存修理工事の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

## はじまり

道後温泉本館は長年に渡って様々な美術品が展示・収蔵されてきた。特に又新殿・霊の湯棟2階の展示室には多くの茶器が陳列されているものの、焼き物の種類と推定年代だけ記載され、道後温泉にとってどのような来歴や意味があるのか誰も分からず、不明であった。

私自身、道後温泉の歴史を調べる中で、その来歴や意味に気付いた。道後温泉の美術品とその来歴は道後温泉本館の歴史的な意味を示す上で大変重要であるものと考え、未来に残す価値があるものと信じている。

道後温泉という歴史的な価値がある場所で何もわからないというのはいささか物悲しく、長きに渡り道後温泉の歴史を調べた結果、少しでも分かったことをまとめ、今後100年先の人たちにこの知識を引き継ぐため筆を執った次第である。

## 道後温泉と

### 伊佐庭如矢の関係性

今回は伊佐庭如矢について取り上げたいと考えている。道後温泉本館との関係性はもちろん、湯之町初代町長である。

伊佐庭如矢は明治23年に湯之町初代町長として現在の道後温泉本館の改革を行った立役者である。彼は町長になる前から、多くの人々から信頼されていた。伊佐庭如矢の人生や略歴については、「伊佐庭如矢翁伝」、「二神鷲泉」（著者：二神将）に詳しく記載されているため、今回は説明を割愛させていただく。

伊佐庭如矢については、多くの書物や文献で、松山城を残したこと、金刀比羅神宮の禰宜、道後



▲伊佐庭如矢

温泉本館の改革、鉄道を道後温泉まで伸ばすことに尽力したなど、彼の成した偉業ばかり書かれている。

しかし、彼の功績ばかり取り上げられているが、彼の人間性、つまり、趣味や嗜好など、一人の人間としてどのような人物であったかについて取り上げた書物は一切ないことが驚きである。一部文献によれば、料理や酒が好きで、道後温泉の観光商品にするため、「湯晒団子」を発案、茶道にも精通しており、高価な茶器を保有していたなどの記述が確認される。

私が道後温泉の調査を行う中で、伊佐庭如矢に関連する美術品があることに気付いた。その一部を今回紹介することで、少しでも多くの人々に伊佐庭如矢の趣味・嗜好に思いを馳せていただければ幸いです。

## 道後温泉碑

道後温泉碑は596年に聖徳太子が石碑を建てたと伝わっている。その後、多くの人々が温泉碑を探したが、見つからず、明治19年に湯之町の町民有志で



▲道後温泉碑（道後温泉本館西側）



▲道後温泉碑（振鷲園）（提供：二神 将）

道後温泉碑の代わりとなる物を道後温泉本館西側に設置した。

道後温泉碑

はその後、振鷲園（現在の振鷲亭付近）へ、昭和25年に道後公園（湯釜薬師の後方）に移設され、ひっそりと佇んでいるのが現在の状況である。（ちなみに温泉碑は昭和28年の「椿の湯」建設時に、平成29年の「飛鳥乃湯泉」建設時に再建されるなど、何度も作り替えられているのが昨今の状況である。）

この道後温泉碑の建設は愛媛県の許可が必要であった。明治16年に愛媛県に申請した代表者が伊佐庭如矢であった。また、その添付書類には温泉碑のデザイン案があり、現在の形と大きく異なるものであった。

（明治18年にこの案は取下げの願いを申請している）



▲道後温泉碑（道後公園）



道後温泉碑デザイン案▶  
(明治18年庶務雑書)

デザインは亀の甲羅を持つ四霊の1つ「靈亀」。その上に碑文を書くであろう、長方形の石が設置され、龍と鳳凰が周りを舞うという中国寄りのデザインである。伊佐庭如矢は皇室専用浴室を有する又新殿・霊の湯棟の名前を四書五経から引用するなど、中国の学問やデザインに影響を受けていることがわかってくる。

## 振鷺園



▲道後温泉本館（明治初期）

道後温泉本館は明治5年に2階建の改築工事を行い、その後、明治27年に神の湯本館として改築工事が行われた。当時の道後温泉本館の周辺は散策場所が乏しく、伊佐庭如矢は道後温泉の東側にある現在の「振鷺亭」がある場所に「振鷺園」という散策

場所を整備したのであった。

その「振鷺園」に2階建の道後温泉本館を移築することで、軽食や遊び場を確保するのであった。その後、道後公園へ再度移築され、「風詠館」という名前で存在していた。

この2階建ての道後温泉本館が「振鷺園」に存在した期間は明治26年～明治33年頃の間と考えられる。



風詠館▶

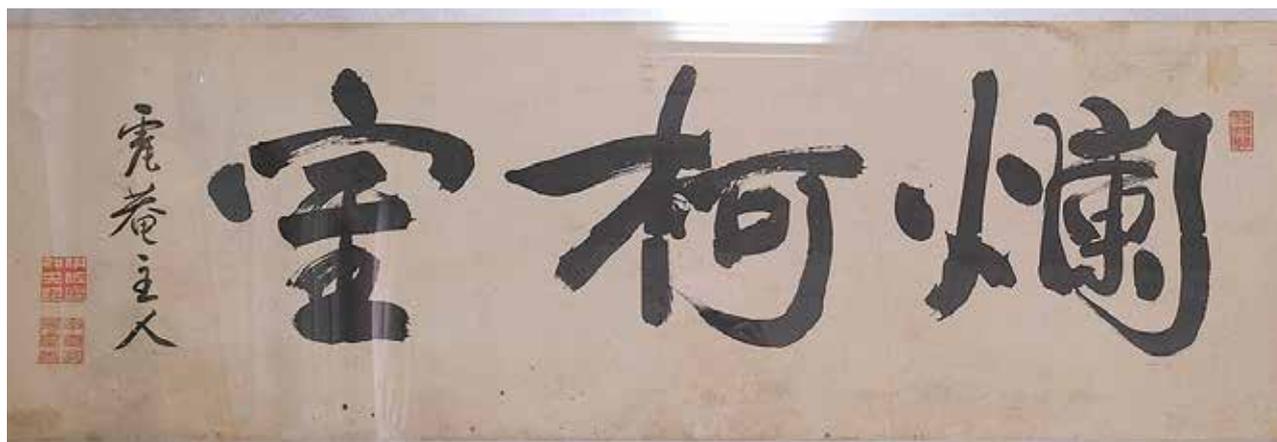


▲振鷺園（揮毫：伊佐庭如矢）

道後温泉には伊佐庭如矢が揮毫した「振鷺園」の書が保管されていた。「振鷺園」の「振鷺」は詩経周頌から引用したものと考えられている。道後温泉増補版には「振鷺は勢いよく群れ飛ぶさま」という意味で鷺の伝説にちなんだものと記述されているのみである。

詩経の文から、「振鷺」は禮を守る立派な出で立ちと読み解くことができ、「振鷺園」は綺麗で立派な園という意味と考えられる。

道後温泉本館頂上の「振鷺閣」については詩経の文から、朝早くから夜遅くまで禮を守ることで長く讃えられますようにとあり、「刻太鼓」の時報や職員のリ節も掛けており、そのことで道後温泉が永く愛されることを祈った意味として捉えることができるものと考えられる。



▲ 爛柯室（揮毫：伊佐庭如矢）

振鷲亭の2階には「爛柯室」という部屋があり、道後温泉には伊佐庭如矢が揮毫した書が保管されていた。「道後温泉と伊佐庭如矢」によれば、この部屋には囲碁倶楽部を置いて、湯治客の遊び場として確保した記述が確認できる。

「爛柯」とは囲碁の別名で、囲碁は時を忘れる、中国の「述異記」に由来するものである。

このように伊佐庭如矢は漢学者としても有名であったため、漢文の書物から名前を引用することが多かったように考えられる。

## 湯釜と掛軸

道後温泉本館の湯釜のデザインを依頼した埼玉県川越氷川神社祠官である山田衛居より伊佐庭如矢宛ての絵が送られている。文章は「道後温泉の湯釜の改造にあたり友人伊佐庭君の求めで湯釜の神像を私が描いたので、この絵を同君に贈ります」とあり、道後温泉本館の湯釜のデザインを依頼したことが、この文章からも読み取ることができる。

阿部里雪が執筆した「道後温泉と伊佐庭如矢」によれば、「伊佐庭如矢が金毘羅宮の禰宜であった時に山田衛居と縁を持ち、ひたすら頼み込ん



▲ 伊佐庭如矢へ贈った絵（山田衛居）▲

で絵を描いてもらった。」と記載されており、山田衛居は最初、道後温泉の湯釜のデザインに乗り気ではなかったが、最終的に伊佐庭如矢に絵を寄贈していることから、湯釜のデザインは結果的に好ましい物になったことが想像できる。

このように伊佐庭如矢は寺社仏閣の人々と繋がりがあり、影響を受けていることがわかってくる。

## 中央廊下の側石

中央廊下の壁面下部に伊佐庭如矢が揮毫した側石を目にすることができる。これは明治27年に神の湯本館を建設した際、「一ノ湯」の浴槽の側石として用いられたものを昭和10年の「神の湯」の浴槽の改築時に中央廊下に移設したものである。

伊佐庭如矢は漢学者であったため、漢文で書かれている。文章は「この温泉が設けられた時期は太古はるか昔のことです。古い歌を調べますと温泉を木で囲い区画して入浴していました（伊予の湯桁）。寛永年間、久松氏（松平家）が（1635年）に松山藩主になりますと、（1638年）に浴槽を石で作って瓦屋根を設け、温泉場を整えました。それ以来250年あまり老朽化が激しいので、相談の上、改築しました。明治26年（1893）6月、伊佐庭如矢記す」とある。

多くの史実と一致するこの文章は大変貴重であり、中央廊下を通る際は是非目に留めていただきたい。



▲ 中央廊下の側石（揮毫：伊佐庭如矢）

## 伊佐庭如矢の茶道具

明治35年伊佐庭如矢は町長を勇退した。その際、「金屏風と茶道具一式を道後温泉に寄贈した」という記述が確認できる。

また、明治32年の又新殿・霊の湯棟の建設の際は「所蔵の書画・骨董を手放し、交際費に充てていた」という記述から、町長勇退の時まで手放さなかった茶道具一式は伊佐庭如矢にとって本当に大事な物であったことが想像できる。

道後温泉に保管されている伊佐庭如矢の寄贈品を紹介する。



▲ 金屏風



花入：武者小路直齋作▶



▲ 香合：薩摩焼（嶋津忠誠公御庭焼）



▲ 茶入：仁清造



▲ 茶匙：織田貞置侯作



▲ 水指：織部焼



▼ 茶碗：高麗焼



▲ 棗茶入：宗旦在判



▲ 天目台：時代唐物

以上が道後温泉に保管されている伊佐庭如矢の茶器である。この他に「茶式花月集（花鳥風月）」（茶道の方法を記したマニュアル）を寄贈しているが、確認できなかった。

ここで勤のいい読者は気付くかもしれない。茶道において最も重要な物、それは「釜」である。書には「釜」の寄贈も確認されているが、道後温泉には保管されていなかった。

恐らく、昭和前期の戦争の時に鉄製品は没収されていた時代であるため、その時に没収されたのかもしれない。（道後公園の秋山兄弟の銅像も金属供出のためなくなった）

伊佐庭如矢は明治33年に小松宮彰仁親王が

道後温泉を訪れた際、又新殿・霊の湯棟3階の4畳半・8畳の間で茶をもてなしたと記載されている。

恐らくその時に使用した茶道具一式であろう。今後、皇室の方が来浴された際、道後温泉の人々が困らないように、茶道具一式を寄贈し、茶道の指南書まで渡していた。

しかし、現在は、誰もそのことを覚えておらず、展示室のケースに並ぶだけの物となっている。そしてその茶道具が伊佐庭如矢の物だったことも忘れ去られ、年代と焼き物の種類だけ記載された来歴不明の展示となっている。

## 衆楽館

道後公園は散策する場所としては綺麗な場所であったが、人々が集い楽しむ場所が無かった。そのため明治34年に嘆願書が提出



▲ 衆楽館の看板（揮毫：伊佐庭如矢）

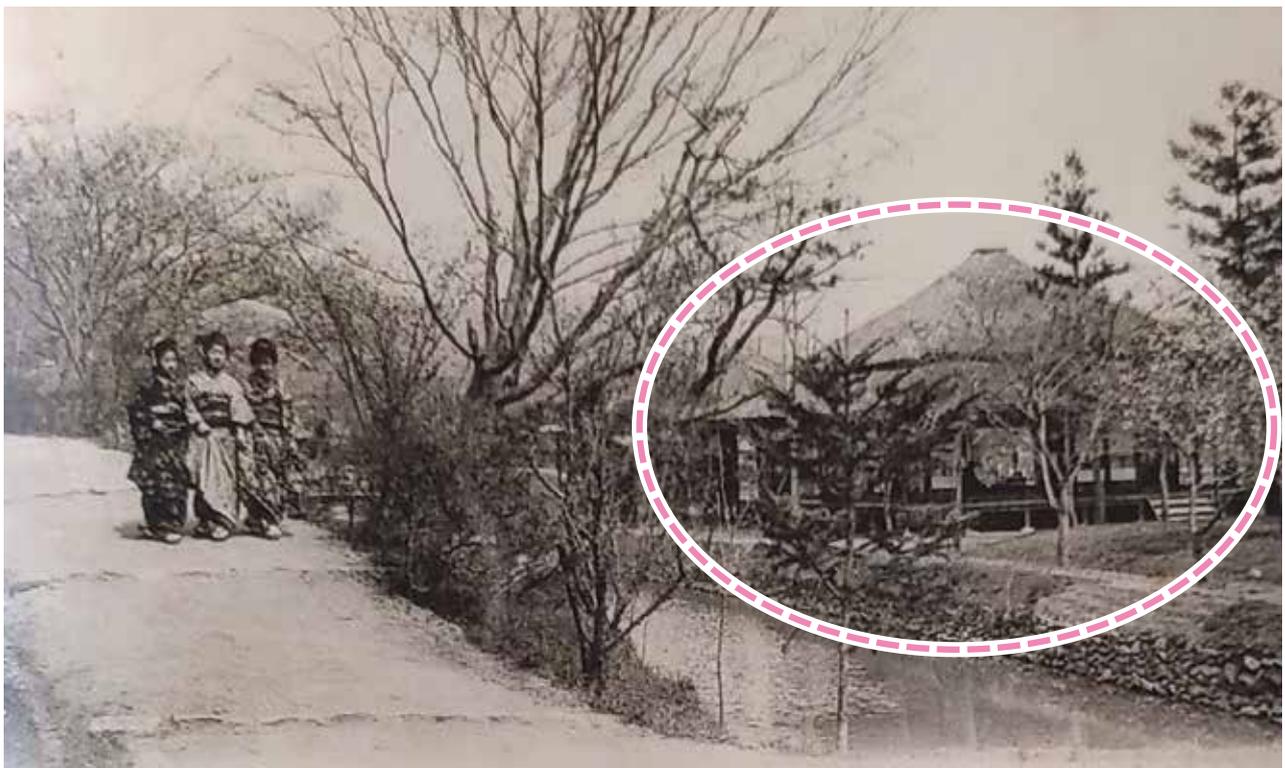


◀ 伊佐庭如矢80歳記念の扇子  
（提供：二神 將）

され、明治39年に建設されたのが衆楽館である。明治40年には伊佐庭如矢の80歳の誕生日を祝う場所としても使用された場所である。

道後温泉には伊佐庭如矢が揮毫した看板が保管されていた。明治39年5月という記載があることから、その時に建設されたものと考えられる。

昭和43年頃に撤去され、現在では誰もそのような建物があったことを覚えていない。



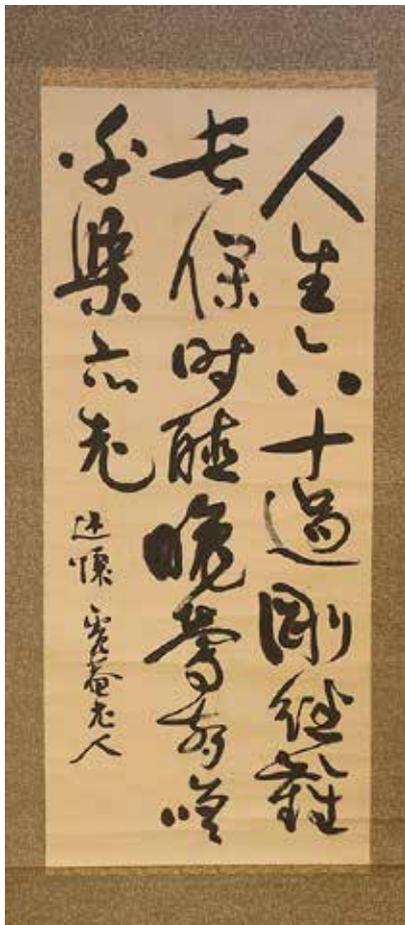
▲ 衆楽館（提供：二神 將）

# 伊佐庭如矢の書

道後温泉に伊佐庭如矢の書が保管されていた。  
「人生六十過 剛経難長保 時聴晩鶯聲 嗟乎樂亦老述懐 震菴老人」

上記のように記載されている。現代語訳すると「人生六十年を過ぎ、年を取ったものだ。強い心で進むことを長く保つことは難しい。こんな時、晩春三月に啼くウグイスの声を聴いた。(なげく気持ちで) ああ、老いを楽しもう。」と解説することができる。

伊佐庭如矢は61歳の時に初代湯之町町長に就任した。明治時代の平均寿命は43歳であり、既にかなりの高齢の域に達していた。それでも尚、町長という大変な役職に就き、道後温泉の改革を成し遂げたのは大変尊敬すべきところである。



◀ 伊佐庭如矢の書

## ■まとめ

このように伊佐庭如矢の関連する美術品から、道後温泉で使用されている名前などが漢文から引用されていることがよくわかる。

また、金屏風や茶器など後の道後温泉で働く人々が困らないよう配慮するなど、本当に道後温泉の未来のことを考えてくれたことが想像できる。

このような伊佐庭如矢の熱い思いが忘れ去られていくことが物悲しくてならない。先述したように道後温泉の美術品の来歴や情報が皆無であり、多くが謎に包まれている。しかし、これらの美術品には意味があり、道後温泉の歴史を解明する上で非常に重要な意味を持っている。このような重要性を理解してくれる人間が少しでも増えてくれることを願い筆を擱く。

## ■参考文献

- 「道後温泉 増補版」
- 「海南新聞」
- 「道後温泉と伊佐庭如矢」
- 「道後温泉誌略」
- 「道後温泉誌」
- 「道後温泉 観光編①」
- 「道後を語る 富田喜平翁談」
- 「川越氷川神社祠官 山田衛居」
- 「二神鶯泉と道後湯之町」
- 「伊佐庭如矢翁伝」
- 「経書大講 第8巻」
- 「明治18年庶務雑書」

\* 本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

# 大天使ミカエルが導いた モンサンミッシェル

西予支部 松山 清

## 1 聖ミカエルの山



▲モンサンミッシェル全景

2019年函館開催の建築士会全国大会でトラピスチヌ修道院を訪ねた際に、門を入った所で我々を出迎えたのが聖ミカエル像だった。右手に剣を持ち足元に踏みつけた竜を刺し殺そうとする雄姿なので少し怖い印象だったが、その竜は悪魔の象徴サタンで、ミカエルが天から地上へ投げ落としたとヨハネの黙示録には記されており、ミカエルは守護神としての存在だと後で知った。そのミカエルの聖地がモンサンミッシェル、つまり「聖ミカエルの山」なのだ。708年にミカエルがオベール司教の夢に3度も現れ、この岩山に聖堂を建てよと命じたと今に伝わっている。

遠くから見たピラミッドのような姿は海の中に聳える孤高の聖地そのものだが、この島全体は修道院を中心とした集合体の村で、山頂に建てられた聖堂の屋根鐘楼頂部に天を突き刺すように聖ミカエル像を設置し、屹立とした姿が一目見ただけで忘れることが出来ないインパクトを与えている。モンサンミッシェルは一度は訪れたいと考えていた所で、パリから日帰りも可能だと知り、今回は万難を排してでも行くことにした。予定していたパリからの日本語日帰りツアーは人が集まらず催行中止となり途方にくれた。観光シーズンではないこの時期、日本語ツアーは催行中止が多く、多国籍ツアーを何とか見つけて行くことができた。

## 2 パリ発バスツアーで行くモンサンミッシェル

2023年2月1日朝4時半に起床、連泊なので荷物はメルキュール・パリ リヨンTGVホテルに置いて、5時半始発の1番線のメトロを目指した。ホテルのフロントはまだ誰もおらず、静寂の中。リヨン駅で朝食のパンとジュースを買い込み地下鉄で6番線ピラケム駅へと向かう。1番列車こそ逃したが、その次の便でパリ旧市街の東から西の端へ移動するため、多くの駅を乗り過ごして6番線に乗り換えた。セーヌ川を渡る時エッフェル塔と集合場所のホテル・プルマン・パリ・トゥール・エッフェルのサインが目に入り、これで迷わずに集合場所へ行けると確信した。

エッフェル塔袂のホテル前に6時45分集合だったが20分前には到着、ポツリポツリと人が集まり始めていた。参加者は揃っているのに予定時刻になってもなかなか出発せず、結局午前7時15分頃バスが2台来た。日本人も少しいるようで、2号車に乗車。真ん中の出入り口後ろの展望の良い席を確保できた。

バスツアーのため車内では寝ていたらいいという気楽さがあるものの、片道5時間程かかる。乗車するときに、日本語対応オーディオガイドを渡された。バスは途中30分程の休憩を1回挟み、高速を西へと走りノルマンディを目指す。サービスエリアの売店で朝食休憩があり、帰りはここで夕食を食べたら良いかと期待していたのに、復路のパリ方面行きのSAにはレストランがなかった。

## 3 モンサンミッシェル

### 3.1 小さな入口と大通りグランド・リュ

モンサンミッシェルへの道中どんよりとしたパリの空模様から一転して青空が見えてきたので、やったあとと思って喜んだのに、到着する頃になると再び雲が広がりどんよりとしたいつものパリの空に近づいてきた。高速道路を下りてしばらく走ると遠くにモンサンミッシェルが見はじめる。この辺りに冬、



▲羊の群れと遠景



▲シャトルバス

良い天気を期待するのが無理というもので、いつもこんな天気らしい。次第に平原で草を食む羊の向こうに孤高の要塞が大きくなっていく。聖ミカエルに祈りを捧げる、均整のとれたピラミッドのモンサンミッシェルは、一言では説明できない複雑な歴史が作り上げた巡礼地だった。

バスはモンサンミッシェルから2.5 km手前にある大駐車場に停車、ここからはシャトルバスに乗らなければならない。シーズンオフのためかシャトルバス乗り場へ移動する人たちがパラパラと歩いているくらいで混雑してはいない。そこにはビジターセンターもあり、コーヒーが自動販売機で売られていたり、休憩スペースがあって帰りにトイレの利用などができた。

シャトルバスは無料で、運転席が前後にあり前進も後進もできるタイプ。自家用車やバスで来た人たちは、最後はここからシャトルバスでモンサンミッシェル島へと渡る。バスは島から300mくらい手前の橋の上で乗客を降ろした。みんな感激で気分が高揚しているのが伝わってくる。すぐにカメラを構え何枚もシャッターを切り続けていた。モンサンミッシェルはフランスで最も人気の世界遺産だそうだ。

モンサンミッシェルの周辺には一面の砂浜が広がり、広大な砂の上を歩いている人もいた。自分も砂浜に下りて歩いてみたが、あまりこの時は危険な感じはしない。しかし橋がなかった頃巡礼者はここを渡る時速い潮に流され命を落とした人も多らしい。そろそろと集団で橋を進みモンサンミッシェル島へ上陸、ワクワクしながら入口門を探す。しかし、広場まで来たのに入口の門がどこにあるのかと迷ってしまう。モンサンミッシェルは百年戦争を乗り越えた堅固な砦なので、目立つほど大きな門はなかった。入口前広場から小さな突出門に入る。この門の前まで車が入っていたが、島民はここまで車で来れるが一般車は進入できないようだ。

村の玄関はこの小さな突出門だけで、門を入った所は小さな広場で、修道院へと続く大通門と左手に公衆トイレがある。右の大通門を抜けると王の門がある広場へ出て、大通りへと通じている。そこにはレストラン、ラ・メール・プラールがあり、モンサンミッシェル名物のオムレツで有名なお店らしい。お昼時に混んでいたもので、帰りに空いていれば食べることにした。たった一つだけの跳ね橋がある王の門を通り修道院エリア内へと入っていく。跳ね橋はここで要塞への侵入者を防ぐ役割を果たしていた。

大通りはグランド・リュと呼ばれるメインストリートで、歩行者天国だが道幅はかなり狭い所もある。メイン通路はこの1本で、それが頂上の教会へと続く。両側はホテル、レストラン、お土産屋さんなどが上り坂まで立ち並び、入口から右へ200mくらい歩いて来ると、この道が修道院まで続いているのか



▲小さな突出門(右)と岩山の聖堂



▲グランド・リュ



▲大通門



▲王の門とラ・メール・プラール



▲階段のグランド・リュ



▲サンピエール教会



▲ 湾を一望する展望台

心配になってくるくらいだ。次第に上り坂になっていく石畳は道幅は2mもないくらいの所もあり、上り下りのすれ違う人の肩が触れあうくらいだ。グラント・リュは右斜めに島を上って行くが、上り坂の終わり付近には展望台があり、そこで折り返す。ここまで入口の門を抜けてから300mくらい。後半は階段となるが、その左手山側にサンピエール教会があった。サンピエール教会は小さな礼拝堂で自由に中に入れることができ、裏には墓地があったので、島の住民が祈りを捧げる教会なのだろう。右下の展望台からは広大な湾とトンプレーヌ岩を望むことができた。展望台で折返すと西のテラスへと上る大階段が始まる。



▲ グラント・リュの折返し



▲ 大階段

### 3.2 岩山の教会と3階建ての修道院

モンサンミッシェル島の周囲は約900m、最高地点は海拔80mで、修道院と教会は岩山の上に建てられており、それを取り囲むようにホテルやレストラン、土産物店が岩山の麓に広がってモンサンミッシェル村を形成し、ピラミッドの姿となっていた。島の周りはずべて建築物で囲まれていると想像していたが、自然の岩が露出している所も多かった。折返しまでは直線的にグラント・リュを上ってきて、ここからの折返しも大階段で西のテラスまでストレートに続く。

大階段を上っていくと修道院の入口があり、チケット検札後さらに上ると最上部の西のテラスへ出る。この西のテラスは3階建て修道院の3層部分にあた

り、付属教会の1階レベルで、正面広場となっていた。この聖堂屋根の鐘楼の尖塔に高さ4.5mの聖ミカエル像が天を突き刺すように聳え立ち金色に輝いていたが、ちょっと高すぎてハッキリと表情をみる事ができない。2016年には取り外して修繕がされ、黄金色に輝くようになったそうだ。



▲ 西のテラスとロマネスク様式の聖堂

### 3.3 内部の部屋と地下室

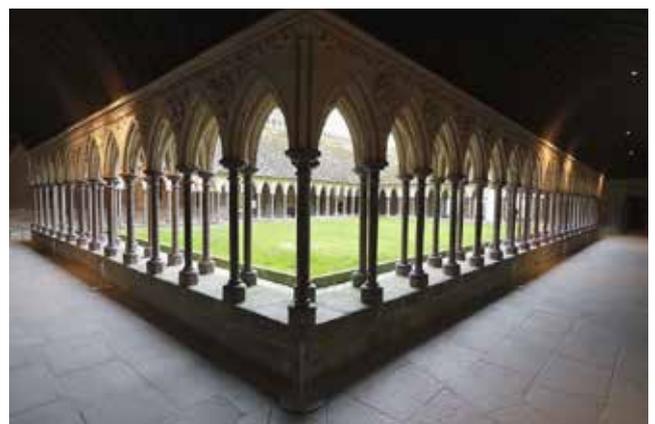


▲ 尖塔とミカエル像

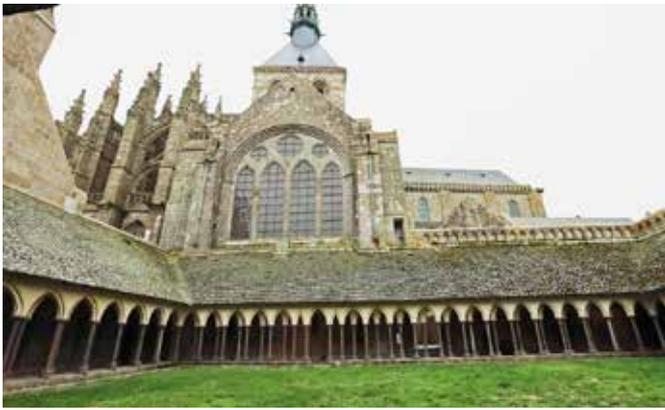
西のテラスから聖堂に入り、内陣を見学。外から見るとロマネスク様式の教会だが、内陣部分はゴシック様式なども複雑に入り交っていた。これは何人もの建築家が長い年月を要して完成したためだ。外部から見るとそれがはっきりと見て取ることが出来た。



▶ 聖堂内陣



▲ 回廊



▲ 聖堂の左側はゴシック様式になっている

聖堂の横には美しい回廊があり、修道士たちの瞑想や憩いの場から、遠くまで広がる潮の速い湾を望むことができた。また聖堂の外観を回廊から見ると、右半分はロマネスク、左半分はゴシック様式となっていることがわかる。聖堂が回廊と隣接する平面構成はヨーロッパの教会でよく見かける配置だ。この回廊までが付属教会にあたる。

回廊に繋がるエリアが修道院の主な施設で、ラ・メルヴェイユ (=西洋の驚異) と呼ばれる。これはフィリップ王が修道院を再建・繁栄させたことによる。修道院では3階部分にあたり食事室だったが、小窓の配置や光の加減など最も豪華な作りの部屋で、修道士たちが食事を摂った所だ。ラ・メルヴェイユを下に降りていくと二層部分が騎士の間、さらに最下層が散策の間となっていた。最下層は岩山の岩盤を取り巻くよう構造物が地下で連続して広がり、上部の聖堂内陣を支える大基柱のクリプト(地下礼拝堂)や11世紀に造られたクリプト・サンマルタンがそのまま残っていて、教会が牢獄となった歴史と変遷を感じることができた。

棋士の間の交差リブや柱頭部の装飾は彫りも深く立体感のある意匠で、ヴォールトのアーチも先鋭化して連続する空間が幾何学的で美しいものだった。また、暖炉もそのまま残されていて冬場の寒さ対策もして修道士の暮らしを守っていたのだ。

その他、最下層には散策の間や貧しい人々に宿と食事を提供する救貧所があった。救貧所は現在売店として使用されており、巡礼者が集まっていた昔の姿に思いを馳せた。



▲ 3層部分の食事室



▲クリプト・サンマルタン



◀ 大基柱のクリプト



▲ 2層の騎士の間



▲ 棋士の間の暖炉

#### 4 モンサンミッシェル訪問を終えて



▲ 散歩の間



▲ 売店

モンサンミッシェルは潮の満ち引きが激しい大海原にある岩山の上に建つ聖堂と修道院がはじまりで、その巡礼者の宿や土産物店がそれを取り囲むように裾野に広がったものだった。ラ・メルヴェイユは国王の保護により均整の取れた美しい内部空間が造り上げられていたが、聖堂を含む付属教会とその地下室は長年に渡って増築を繰り返し、牢獄となった運命を辿りながら今なお巡礼者を迎え入れている。外観からは想像もしていなかったが、聖堂以外の空間にもリブとヴォールトで上部空間を支持する構造が多く印象的でもあった。

レストラン、ラ・メール・プルールを帰りに覗くと、一緒に来た日本人家族がオムレツを食べ終わったところだった。待ち時間が長くてこれから修道院を見るというが、時間が足りなすぎる！ちょっと驚いている私と少し言葉を交わし、大階段へと向かって走って行った。オムレツがあまりにも有名すぎたのかもしれない。

## 大洲市の有形文化財

## 旧松井家住宅

文化財・まちづくり委員会 委員 菅野 隆次

旧松井家住宅は、フィリピンのマニラにおいて貿易会社を営み、多角的な事業拡大を図り大きな富をなした松井兄弟の兄、松井傳三郎（1870～1920）が立地を計画し、明治37年（1904）に購入した土地に、その意を継いだ弟の松井國五郎（1875～1945）が大正15年（1926）に完成させた名建築である。

この松井兄弟は現在の大洲市出身で、明治33年（1900）フィリピンのマニラ市サンパロ区に日本製の商品などを扱う雑貨店「松井商会」を設立した。明治37年（1904）松井傳三郎が大洲市柚木317の土地を購入し、大正15年（1926）に旧松井家住宅主屋を竣工させた。



▲修復して蘇った旧松井家住宅

旧松井家住宅主屋などの竣工から80年以上経過した平成20年（2008）に、旧松井家住宅主屋及び石垣が国登録文化財に、平成27年（2015）に大洲市に寄付され、平成28年（2016）旧松井家住宅主屋及び石垣が大洲市指定文化財となった。文化的価値を残したまま、経年により失われつつあった建物の健全性を取り戻すとともに、より有効な活用につなげるため「旧松井家住宅整備事業基本構想計画」や「旧松井家住宅保存活用計画」等を策定して保存活用を進めた。



▲石垣は市の文化財に指定されている

旧松井家住宅の立地場所は柚木町が一望でき、肱川、富士山、亀山などの典雅な自然景観が眺望できる場所を

選定しており、別荘地としては最適な場所に建設されている。住宅は、一部地下、一部2階を有する平屋を主体とした木造3階建ての建物である。屋根形式は、主要な部分は入母屋造であるが、寄棟造や切妻造も併用し、さらにルーフバルコニーを組み込むなど変化に富んだ外観造形となっている。高台の急斜面からせり出すように建つ木造3階建ての荘厳な姿は、地域の代表的なランドマークとして存在し続けており、現在の町並みの景観形成においても貴重な存在である。

住宅内部は、土間から玄関の間を経ると二間続きの和室があり、やや広めの廊下が取り囲んでいる。この2室のうち十二畳半の主座敷には、床、違い棚、付書院が備えられているほか、長押を設け他の部屋より天井を一段高くし、貼付壁には高級襖紙を用いるなど意匠の多くが見られることから同住宅の中心的な部屋であったと考えられる。

1階座敷は、高い天井に茂欄間、無節の檜材に黒漆塗りで仕上げられた床框・違い棚・付き書院に見られるのは、簡素で完結でありながら荘厳な座敷飾り等、非常に格式の高い伝統的書院造りの形を評している。

和室の南側には八畳の寝間と四畳半の茶室が設けられ、2階には三畳、二畳と八畳の3室が配置され、八畳には地板床と地袋付の棚が備えられている。

茶室は網代建具や赤松皮引き床柱、外回りの腰板には舟板の古材を使うなど手の込んだ細工が見られ、浴室には大正年間には珍しい化粧室が設けられ、女性への配慮が感じられる。又、台所の裏庭側には奥に向けて50m以上横井戸が設けられており、奥から流れ込んできた水が台所に設けられた貯水槽に送られる仕組みになっており生活用水として活用された。この水の確保があったことが「盤泉荘」という名称で呼ばれる由縁である。

旧松井家住宅の特徴としては、良質な材が主屋の構造材及び造作材に使用されているほか、フィリピンで貿易業を営んでいた施主らしく、東南アジアで選び抜かれた南洋材イペール（2.5m×1.0mの一枚板）が廊下に20枚連続して使用されるだけでなく、鬼瓦にはイニシャルの「K・M」を用いるなど国際性豊かな一面が見られる。

基礎部分は、石場建て工法に加え、部分的にコンクリート基礎にボルト固定され、伝統工法と近代工法が混在したものとなっている。また小屋組には一部であるが金属のトラスが組み込まれ、ここでも近代工法の試みが見られる。さらに、主屋を支える石垣は、黒（緑）色片岩をX字状に積み上げるなど独特な積み方ではあるが、主屋との一体感を持たせており見た目を意識した意匠性の高い石垣となっている。

旧松井家住宅は、伝統的技術と近代的技術を駆使しながら近代を先取りした傑作であり、数奇屋造りと伝統的書院造を組み合わせた近代和風の貴重な名建築として評価できる建造物である。

# 令和5年度 全国まちづくり委員長会議報告

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和  
委員 花岡 直樹

令和6年2月23・24日に令和5年度全国まちづくり委員会(第32回まちづくり会議)が熊本にて開催された。当初、熊本での地震災害・復興が主題であったが、急遽1月の能登地震の内容も入れ、会議時間いっぱい詰り込んだ、実りある会議となった。



▲会場となったカーリーノMS (旧三井住友銀行熊本支店)。  
1934 (昭和9) 年の建築

## 第1日目

初日の第32回まちづくり会議は「熊本地震後の歴史的町並みを活かしたまちづくりの動き」について行政・民間から様々な話があった。

2016年の熊本地震は最大震度7を含め、数回にわたって大規模な地震が起こった。その地震により、未指定文化財の多くが被災、倒壊を免れた建物も取り壊すか、残すかという難しい選択を強いられた。補助金は取り壊すなら全額出るが、改修するとすれば取り壊しの補助金は得られない。また、仮設住宅に住むこともできなくなる。改修に当たっても問題は多く、災害の規模が大きいため、まず見積りをするための業者がなかなか見つからない状況であり、話が思うように進んでいかない。未指定文化財であるためどのような補助金を使用するのか?できるのか?の判断も必要であった。文化財レスキューにあたったヘリテージマネージャーも、どのように残すかという事にとっても頭を悩ませたようである。愛媛県での災害の事前準備として、まず建築・建設業者の連絡網の整備が必要であると感じた。

熊本では業者を語る詐欺も多く、金銭トラブルがあったこと、調査した建築士から信頼できる業者への連絡ができにくかったことが述べられていた。行政や団体との連携が滞りなくできるようなシステムが必要であると感じた。また熊本では、行政及び民間NPOなどが、残す方向で建築だけでなく景観などといった様々な補助金を

活用できるよう情報を提供したようである。こういった補助金や罹災者へどのようにサポートしていくか、ヘリテージマネージャーと地方行政への信頼関係や繋がりが必要であると感じた。

熊本では建築を残す、ということだけに留まらず、その後もNPOなどを通じて様々なフォローがなされている。

2021年に役割を終えて解散したが、罹災した文化財保持者への協議会や補助金を支えた「まちなみトラスト」をはじめ、まちづくりを持続していくための(一社)KIMOI RIRONなど、様々な民間団体が行政と協力し活用を見出している。特にKIMOI RIRONは空き店舗のファサード、店先(入口付近)を利用してのディスプレイ型店舗「マドカイ」という事業を行っていた。店先に展示し、気に入ればバーコードで買い物を行う。シャッター商店街や暗い街並みを明るくする、また、人通りを復活させる画期的なアイデアである。今後の町並みの活用法に一筋の光を感じた。



▲マドカイの説明をしてくださる熊本県建築士会

愛媛県において、震災後の他県士会との連携、ヘリテージマネージャーとの連携も大きな課題である。未指定文化財については行政との連携も必要であり、今後の課題を多く感じた。(峰岡)



▲残された熊本の町並み。  
ビルの合間を点在するが民間団体が心をつなぐ

## 第2日目

第2日目の報告をする前に、前日夜の懇親会のことを少し。委員会の会場からはうんと離れた「壱之倉庫」という築150年を超える酒蔵を移築復元したレトロなビアレストラン。座席は自由でもくじ引きでもなく指定席。1月の中四国まちづくり委員長会議のときに親しくなった山口県の方や、懇親会の士会担当の神奈川県的女性と同テーブルで楽しく盛り上がった。



▲壱之倉庫での懇親会（後光が差しています）

さて、2日目の前半は「震災復興における熊本の歴史まちづくりを学ぶ」と題したグループに分かれたワークショップが行われた。なんと、前夜の懇親会のメンバーそのままのグループであったため、すっかり打ち解けた雰囲気の中でワークショップが進行した。内容は、①熊本の歴史まちづくりの方向性、②熊本のまちづくり組織とその連携、の2項目について「明らかになり、評価できること」「質問や疑問に思ったこと」をそれぞれが付箋に



▲ワークショップの様子

書き出し合い、それを項目ごとに整理しグループごとに発表、という形態であった。補助金の利用、行政やヘリテージマネージャーとの連携、他県との協力体制、持続性は、といった意見が多く出された。



▲峰岡チームの発表

午後の後半からは、令和5年度全国まちづくり委員長会議に移行。例年であれば、各ブロックに分かれて事例報告や意見交換を行うが、今年度は熊本地震、そして今年の1月1日に起こった能登半島地震を受けて、4名のパネラー（能登2名、熊本2名）から報告があった。

午後は発表者に参加者も交えてのパネルディスカッションを行った。三井所前連合会会長の仮設住宅への提言もあり、活発な意見交換がなされ、例によって40分押しでの閉会に至った。

参加していつも思うことであるが、会議で勉強したこと、刺激を受けたことを愛媛県の活動に生かせるよう頑張ろうと、峰岡委員長と誓って帰路についた。（花岡）



▲会場の中の様子

# ひのまる工務店のこれから

## 松山支部 島本 真裕子

いつもお世話になっている清水さんからバトンを受け取りました、松山支部の島本と申します。初めての方も多いと思いますので、自己紹介をさせていただきます。私は、リノベーション・新築住宅・店舗デザインを手がける株式会社ひのまる工務店として2022年に松山工業高等学校時代の同級生と共に創業しました。



▲代表黒田と私

企業理念や目指す方向性などを創業4年ほど前から定期的に集まり計画しました。計画では2026年に創業する予定でしたが、そこまで待つ必要はあるか、今やってダメならいつ行動しても同じと、計画より前倒しで創業することにしました。創業の前後1年は、寝る間も無く慌ただしく毎日が過ぎていったことを昨日のように覚えています。創業当時26歳で、知識も経験もベテラン建築士さんより劣り、苦労したことも多々ありました。夢や成し遂げたいことについて話したとき、心配されることも、嘲る意見をいただくこともありました。単に、建築が大好き！大好きな建築でみんなを幸せにしたい！愛媛の建築業界を盛り上げたい！の想いで突っ走っていました。

そうすると、ありがたいことに応援してくれる方や助けてくれる方も増えていきました。もちろん失敗することもあります。失敗から学ぶことの方が多いため失敗を恐れませんが、私たちは、感謝・謙虚・向上心を常に忘れず日々の業務を行なっています。これからも関わってくださる皆さまに感謝し、謙虚な心で向上心を持ち行動していきます。

そして2年経った現在では、グループ会社も増え、一企業としても幅が増えました。私たちはみんな、今もなお夢を持ち、ミーティングのときにそれぞれの夢を共有し、どのように叶えていくか話し合います。

また、私たちは工務店にとられる事なく、さまざま

な取り組みもしています。クッキングワークショップ、キャンドルワークショップ、キッズ手形アート、海外子ども服のポップアップなどのイベントも行っています。料理が得意なスタッフがいたら、それを活かせる社員食堂を始めてみたり。建築をしながらみんながワクワクして働ける環境でありたいと常に考えております。

今後のグループテーマは、『ワクワクする“会社”をつくり、夢と可能性を奪われない“社会”をつくる』。

恥じることなく、夢を持って公言していると少しずつ、夢に追いついたり、夢が叶ったりします。

「できるわけない」と思わず、「あの松工卒の二人ができていたのだから私にもできる」と誰かの背中を後押し、できる存在になるため今後も精進していきます。

ホームページやInstagram、YouTubeで私たちの様々な活動を発信しておりますので、ぜひ検索していただくと今後の活動の励みになります！

新入りではございますが、みなさま今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

今回「けんちくの輪」のバトンを渡していただいた清水さんのように建築知識をつけるべく、建築の勉強も頑張ります。清水さん、誠にありがとうございました。次は松山支部の藤岡さんにバトンを受け取ってもらいます。藤岡さんよろしくお願い致します。



▲ 1階事務所、2階は株式会社bokuno（グループ会社）



▲ ホームページQR



▲ Instagram QR

# 楽しいを見出す

西予支部 和氣 巨秀

八幡浜支部、小西健介さんからバトンを受け取りました、西予支部の和氣と申します。当支部には親子3人(父、兄)が在籍しており、総会等では3人が出揃うこともあるわけでありまして、何とも言えぬ実家感が出てしまう絵面になってしまうのです。(笑)

それはさておき、少し長い自己紹介にお付き合いください。私の実家は祖父の代からの建設業を営んでおり、小さいころから工場では大工さんが木材を刻んでいたり、家を建てる仕事が身近な環境で育ちました。いつからこの仕事を目指すようになったかというわかりませんが、小さいころから大工さんになると言っていたように思います。

高校のころから家具などのデザインやインテリア系に興味を持ち、照明を作ったり、自分の部屋をいじって遊んでいました。自分でデザインする、空間を創ることに興味を持ちだしたのはこの頃かもしれません。

高校を卒業すると建築系の学校へ進学し、基礎知識を勉強しました(半分遊んでいました…)が、京都にいたのでお寺巡りが楽しみでした。修学旅行でも行きましたが、同じ場所でも勉強して改めて行くと全然違った見方ができました。今行くとまた違った視点で楽しめるのだろうと思います。

就職では大手メーカーの設計課として配属は松山になり、愛媛に帰ってくることになりました。社会人マナーから始まり、現場調査から設計、申請業務など専門的な知識から夜の松山まで、多くの事を学ばせていただきました。机に向き合うことがメインな設計業務でしたので、たまに出る現場が楽しみでした。

10年程前に西予市野村町の今の会社に帰ってきたわけですが、途端に現場管理をすることになりました。初現場がJV工事で規模も大きく、右も左も上も下もわからない仕事を、怒られながらもただがむしゃらにしたことを覚えています。昨今の働き方改革とは程遠い世界でしたが、完成した時にはえらく感動したことを今でも覚えています。

初めてで大変な思いをした現場でしたが、わからないことでも飛び込んで経験すれば身になることを実感できました。

それから数年後、地元野村町が西日本豪雨災害に見舞われました。会社も被災し、自宅も床下浸水。電気・水のない生活を経験し、改めて普段の生活のありがたみ、大切さを実感しました。まだ復興は道半ばですが、自分の携わる建設業がこんなにも重要な役割を果たしている

のだということを改めて実感できました。

野村町のシンボル・乙亥会館災害復旧工事では細部の仕上がりまでこだわったことはもちろんですが、仕上げの土俵工事において、地元相撲関係者や相撲部の子供たちの協力を得て一緒に土俵づくりができ、地元の気持ちも汲み取った仕事ができたんじゃないかと、感謝の気持ちとともに貴重な経験を得ることができました。



▲野村といえば相撲。乙亥会館災害復旧工事

そして昨年、(株)だいわの代表取締役役に就任しました。責任と電話とおつきあいの数は増えましたが、まだ実感は少なく、今後も挑戦・一つ一つを丁寧に・何事にも楽しいことを見出しながら成長を続けていけたらと思っています。

長々とお付き合いありがとうございました。

次は、西予支部・水口優太さんへバトンを渡したいと思っています。よろしくお願いします！



▲現在進行中の野村育成園移転新築工事。完成が楽しみです。

## [事務局からのお知らせ]

### 会員の皆様、会費の納入時期です。

令和6年度の会費納入時期となりました。本会運営の財源として大きなウエイトを占める会費ですので、会員の皆様方の早期納入をお願いします。

納期は本会の定款により毎年6月末日としております。

会費を銀行口座引落しにされている方は、6月27日（木曜日）に指定口座から引き落としさせていただきますので、よろしく願いいたします。

会費を銀行口座引落しにされている方につきましては、請求書は郵送しておりません。

請求書・領収書が必要な方は建築士会事務局までご連絡ください。

【会費は下記のとおりです。】

正会員の方…………… 18,000円

準会員の方…………… 12,000円

正会員+建築CPD情報提供制度に参加の方…………… 18,520円

準会員+建築CPD情報提供制度に参加の方…………… 12,520円

賛助会員…………… 一口 10,000円（4月に請求書を郵送しております。）

※日本建築士会連合会WEBサービスシステムが令和6年3月31日に終了した為、WEBからの年会費納入も終了となりました。今までWEBサービスをご利用いただいていた会員の皆様にはご不便をおかけすることとなり誠に申し訳ございません。何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

2024.3のいしづちNO.157号の「宇和島市津島町岩松の重要伝統的建造物群保存地」の記事において、参加された建築士(ヘリテージマネージャー)に田中陽子様の名前の記載漏れがありました。追加いたします。(文責・酒井純孝)

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

### 「いしづち」の次号の原稿締切日

令和6年 7月号 (159号) 令和6年5月30日(木)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。 情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内) 宛 FAX 089-948-0061

## 編集後記

和歌山県高野町にある弘法大師・空海が開いた高野山真言宗の総本山で、高野町の金剛峯寺に訪れました。あまりの寺院の広さと建物の多さに驚き、ここでは本坊だけをピックアップして書きたいと思います。

本坊の中核をなす「大主殿及び奥書院」は、江戸時代の末期に再建されたもので、客殿と庫裏、そして書院が一体となった複雑な間取りが特徴でした。中でも、総本山の寺院にふさわしく、意匠を凝らし高い格式を感じさせる客殿の「大広間」や「土室と茶の間」、吹き抜けに太い梁が交差した「庫裏」は、いずれも見応えのある空間となっていました。

また、それぞれの部屋の屋根が連なる建築は、高野山のさまざまな寺院で見られる伝統的な造りとなっているなど、文化財としても高い歴史的価値があるように思いました。重要な儀式や法要が行われる「大広間」は、ふすま絵に松や鶴の群れが描かれ、格式高い造りになっていました。

そして、「土室と茶の間」は、<sup>つちむろ</sup> 囲炉裏の間にあり、土室と呼ばれています。土室とは「土を塗り固めて作った部屋」という意味だそうです。高野山はご存じのように、冬場は非常に厳しい土地です。暖をとるための工夫として土壁で囲んだ部屋の中に囲炉裏を設け、できるだけ保温効果を高め、風寒をしのぎました。囲炉裏は天井まで4本の柱と壁が立ち、煙を天井から屋根の外に抜くようにできています。火袋には小棚が設けられており、弁財天さまをおまつりしていました。

また、台所である「庫裏」は江戸期以降、実際に大勢の僧侶の食事を賄ってきた場所でした。柱や梁も煤で真っ黒になっており、水飲み場は湧き水を高野槇の水槽に溜め、大きな「かまど」は現在も使われていました。炭をおこす場所には防火対策として大きな煙突が配置されています。そして、天井から吊り下ろした台には食物が保存されていました。天井から吊ることで風通しをよくし、さらに紙を垂らすことによってネズミの侵入を防いでいたのでしょう。一つの釜で約七斗(98キログラム)のご飯を炊くことができる大釜が三基並んでいて、三つで一度に二石(約2,000人分)のご飯を炊いていたそうです。昭和50年代まで、年末の餅つきの際に使われていました。二石釜の真上には行灯が吊られ、正面には台所の神様である三宝荒神をおまつりしていました。

見どころはたくさんあり、気になるところだけを書きましたが、総本山金剛峯寺という場合、金剛峯寺だけではなく高野山全体を指すようで、全てを見るには数日かかるのではないかと思いました。普通、お寺といえば一つの建造物を思い浮かべ、その敷地内を境内といいます。高野山は「一山境内地」と称し、高野山の至る所がお寺の境内地であり、高野山全体がお寺でした。

私は初めて訪れましたが、この歳になり、お寺の見え方が変わってきたと思います。皆さんも時間に余裕を持って一度訪れてみてはどうでしょうか。

## 〈いしづち〉2024/5

令和6年5月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061

http://www.ehime-shikai.com

印刷所 アマノ印刷株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉 花岡 晶子